

## 緒言

### 大谷卓也

Takuya OTANI

東京慈恵会医科大学附属  
第三病院 整形外科

整形外科は外科学であり、若手ドクターの中には手術には大変興味があるが、保存的治療にはあまり興味がないという人も少なくないかもしれない。しかし、すべての整形外科的治療の基本は保存的治療にあり、整形外科医はさまざまな保存的治療を自在に操ることができる必要がある。これには以下のような理由がある。

- 1) 手術治療を必要とする患者より保存的治療を必要とする患者のほうが圧倒的に多い。
- 2) どのような患者もできるだけ手術はしたくないし、できる限りの保存的治療を行ってほしいと望んでいる。
- 3) 保存的治療はいくつかの異なるアプローチが組み合わせられることで最大の効果が発揮される。
- 4) 手術治療の効果を最大限に発揮するためにも、保存的治療の複数のアプローチを理解し使いこなせることが非常に役に立つ。

薬物(内服、注射)療法、ギプス・副子療法、理学・物理療法、運動療法、装具療法、そしてリハビリテーション理論などに精通し、選択的な症例に手術治療を組み合わせるとするのが整形外科的治療の本来の姿であろう。

さて、本誌上シンポジウムでは股関節疾患に対する保存的治療とリハビリテーションについて、6つのテーマで執筆をお願いした。日常診療で遭遇する機会の多い変形性股関節症の病態には、形態学的、生体力学的、生物学的などさまざまな要因が関連しており、その保存的治療を考えることはとても興味深く、整形外科らしさに溢れていると言える。一方、大腿骨頭壊死や大腿骨寛骨臼インピンジメント(FAI)に対する保存的治療が論じられる機会は比較的少ないかもしれない。しかし、大腿骨頭壊死に対してもさまざまな角度から保存的治療の研究がなされ、また、進行中であり、最新の知見を理解しておく必要がある。FAIの病態の根本には既存の骨変形があり、したがって保存的治療の介入する余地はないのか、それとも十分に行う価値があるのか、どのような症例に、どのような方法で、大変興味深いこれからのテーマである。本シンポジウムが若手ドクターの明日の診療の一助となることを期待している。